

15. 熊本城と熊本

(1) 熊本城の特徴

① 熊本城は巨大な真田丸

熊本城は、現在でも天下の名城と言われるように、戦国の城らしさを漂わせた見る人を引き付ける城です。最大の特徴は、石垣と城郭を中心として城全体に外からの攻撃を撃退しようとする意志が感じられる点にあると思われます。城は、本丸と11の曲輪に分かれ、各曲輪は、死角の無いように配置された石垣で囲まれ、かつ石垣上には五階や三階などの重層櫓や多聞櫓、櫓門などを築き、敵が侵入しようものなら三方、四方の上部から攻撃できるようになっています。その曲輪に至る通路も石垣で柵形や喰い違い構造を作り、通過する敵を三方、四方の上部から攻撃できるようになっています。これらの石垣が幾重にも築かれ、まるで石垣の迷路のようです。通路では、石垣に押しつぶされそうな圧迫感を感じます。また城の外周は、小高い山の崖に沿って石垣を築き、さらに空堀や水堀を配しているため、高い絶壁の様相を呈する所が多く、侵入不可能な気持ちにさせます。熊本城は、大阪城、名古屋城、姫路城などの城と比べ小高い山に築かれているため、見上げる形となり、視覚に迫るものがあります。

実は、熊本城は、茶臼山という標高50m程の小山に築かれたことから、他の城と比べてそれほど広大というわけではありません(96万㎡)。広さで言えば、惣構えが大きい江戸城や大坂城や小田原城などにはるかに及ばず、福岡城(80万㎡)や広島城(90万㎡)と同じ程度です。良く形容される難攻不落という点についても、大坂城や姫路城は言うまでもなく、見方によっては福岡城や広島城にも劣ると思われます。清正も「熊本城は3日、4日しか持たないが、福岡城は30日、40日持つ」と言っています。確かに、籠城することだけを考えれば、黒田如水が縄張りをした福岡城や広島城は、自軍の被害が少なく容易に籠城できますので、難攻不落と言えます。如水が縄張りをした城は、広い池や川、水堀に囲まれた水城を特徴としています。まるで水上の要塞で、橋を落とせば攻め入るのは不可能で、難攻不落であることは事実です。しかし、低地にあるため、川をせき止めれば孤立し、相手が大軍なら食料が尽きて敗戦必定です。

如水の水城の発想は、備中高松城から来ていると思われます。備中高松城は、一面が池に面し、三面が沼に面していました。このため秀吉軍は、約2万人で包囲しましたが、攻め落とせませんでした。そこで如水の指導のもと約300m(3kmという説もある)の堤防を築き、水攻めを行うわけですが、水攻め後の備中高松城は、湖上に浮かぶ城となり、一層難攻化しました。ここから如水は、籠城戦なら水城、という結論に至ったと思われます。しかし、これでは、敵軍に損害を与えることはできませんし、援軍が駆けつけたとき、城から打って出て挟撃することもできません。単なる味方の救援を待つだけの城となります。水城は、強力な援軍が駆けつけることを前提とした、籠城に徹した城と言えます。

如水の水城に対し、清正の熊本城は、小高い山に築かれた平城です。清正が築城に参加

した名護屋城、西生浦倭城、蔚山倭城も平城でした。熊本城は、北は深い崖と石垣と空堀、南は内堀の坪井川にそって石垣と長堀と多間櫓、東は急斜面に石垣と多間櫓となっており、要害です。それに対して西は、長い斜面となっており、北・東・南ほど要害な地形ではありません。そこで、出丸を配し、その外に空堀を設けたうえで、二の丸や三の丸などの曲輪を設けて防衛する体制となっています。従って、地形や配置から見ると熊本城は決して難攻不落な城ではないのです。

熊本城が難攻不落さを示したとされる西南の役では、籠城軍約 4 千人に対して、包囲した薩摩軍は最大 1 万 4 千人程度と言われています。薩摩軍は、熊本城の弱点である西側から 4 日間攻撃をかけましたが、城内に侵入できませんでした。清正は、朝鮮での蔚山城籠城戦で約 5 万 7 千人の兵に包囲された経験に基づき熊本城を築城していますので、1 万 4 千人程度の包囲で、かつわずか 4 日の攻撃で落とせなかったのは当然とも言えます。それも籠城政府軍が最新式の大砲や鉄砲だったのに対し、薩摩軍は旧式の大砲や鉄砲でした。その後薩摩軍は、北からの官軍に対処するため、熊本城包囲軍を 4 千人～5 千人に減らし、坪井川と井芹川の合流地点をせき止めて、水攻めを行っていますが、熊本城は小高い山に位置しており、効果がありませんでした。清正も備中高松城攻めに参加していたことから、水攻めも想定して築城していたと言われています。その後政府軍の到着により、薩摩軍は熊本城の包囲を解き、東に移動し、熊本城包囲戦は終了します。西南の役で薩摩軍が熊本城を落とせなかったのは、城の西側での交戦で人的損害が嵩んだからであり、熊本城が物理的に難攻不落だったからではありませんでした。

熊本城は、籠城しながら、城に施された仕掛けによって攻めてくる敵に損害を与え、援軍が到着したら挟撃に転じるというあくまで戦いに勝つために作られた城です。この点で、黒田如水の水城とは、考え方が全く違うのです。清正は、「熊本城は 3 日、4 日しか持たないが、福岡城は 30 日、40 日持つ」と言いながら、その差となっている水堀を増やしていません。水堀のない北側や東側、一番弱点とされる西側も、坪井川や白川、井芹川が近くにあり、水堀を作ることは容易でした。これは、熊本城は籠城に徹した城ではなく、城際で戦うための城であることを示しているように思われます。単に籠城するだけでなく、城際に引き寄せて叩くためには、水堀より空堀が効果的だったのです。それは、大坂城の真田丸を見れば分かります。水堀よりも空堀を多く配した熊本城は、巨大な真田丸とも言えます。

清正の籠城しながら戦う戦法は、蔚山城籠城戦以前に起源があるように思われます。1592年の後半、朝鮮で清正が治めていた咸鏡道で義兵が組織され、清正軍は西に追いやられます。清正は、吉州、端川、城津の番城に在番兵をおいて防衛しようとしませんが、義兵の勢いが強く、番城は包囲され、籠城戦を余儀なくされます。ここで清正は、「城際に引き寄せて打ち取り、深追いするな」と指示しています。文禄2年（1593年）6月の第2次晋州城の戦いでは、高い城壁を持つ城の有用性を再認識したと思われます。この戦いで清正は、先鋒を務め、石垣を崩壊させ城内に突入するという武功を挙げますが、この晋州城は、朝鮮随一の難攻不落の城と言われていました。その特徴は、一方を川、三方を水堀に囲まれ、そ

の周囲を高い城壁が囲む構造にありました。朝鮮側はわずか約3千人の兵や住民が籠城し、日本軍約9万人の攻撃に1週間耐え抜きました。日本軍は三方の水堀の水を一段低い所を流れる川に落とし空堀とし、空堀から城壁に取り付けましたが、近づくと城壁上から鉄砲や弓矢、石、火で焼かれた鉄屑などで攻撃され、城内に侵入できないのです。晋州城は、単なる籠城するための城ではなく、攻めてくる敵を城際で打ち取れるから、難攻不落だったのです。蔚山城籠城戦でも、籠城しながら、城際の戦いで敵に大きな損害を与えています。第2次蔚山城の戦いで、約3万人の明・朝鮮連合軍が包囲し攻撃しながら、結局撤退したのは、攻め込んで城際で攻撃され損害が大きくなったからです。福岡城は、晋州城を参考にしていう説がありますが、熊本城こそ晋州城を参考をしていると思われます。

福岡城や大阪城・姫路城が水堀と巨大な石垣に囲まれた物理的な難攻不落の城とすれば、熊本城は、西側から攻め手を誘い込み、攻め手の損害を大きくして、攻め手の心を折る精神的な難攻不落の城なのです。

②隅石1本柱は晋州城での教訓から

見た目の美しさについては、築城当時の天守や櫓などが多数残る姫路城、彦根城、松山城などに比べると、見劣りするように思われます。例えば、姫路城が優雅で壮麗であるのに対し、熊本城は、武骨で粗野とも言える城です。姫路城は築城当時の天守閣で、熊本城は鉄筋コンクリートで外観復元されたものであることが大きな原因ですが、姫路城は、朝鮮出陣経験がなく、家康の代表的姻戚大名である池田輝政が、徳川幕府の威光を示すことを意識して築城した城であるのに対し、熊本城は、蔚山城籠城戦で地獄を味わい、秀吉の死により朝鮮から逃げ帰った清正が、攻守所を変えた明・朝鮮軍の日本侵攻に備えて築城した城であり、2人の経験と目的の違いが2つの城の特徴を大きく違ったものとしていると思われます。

熊本城には、清正がいくつかの城作りから習得したノウハウと朝鮮で味わった2回の籠城戦の経験に基づいた対策がたっぷり作り込まれています。清正が初めて城作りに関わったのは、名護屋城の城普請奉行の1人になったときからと思われます。名護屋城の石垣群や縄張りを見ると、熊本城に似てるような感じがします。

清正は、文禄2年(1593年)6月の第2次晋州城攻めで、城の隅石に関して重大な経験をしています。その戦いで清正は、黒田長政と先攻を務め、晋州城の城壁を壊し、城内に攻め入りますが、そのとき堅牢を誇った晋州城の城壁を壊す原因となったのは、出櫓の1個の緩んだ隅石の発見でした。ここから崩せると踏んだ清正と長政は、亀甲車を使いそこに近づき、隅石を次々と剥し、その部分の石垣を崩壊させたのです。熊本地震で飯田丸五階櫓が隅石の1本の柱列で支えられている映像が感動を呼びましたが、これは晋州城が1個の隅石から攻め落とされたことから教訓を得て、隅石一個の積み方にも気を配ったからかも知れません。

清正が実際に縄張りから、普請、作事まで一貫して行ったのは、朝鮮の西生浦城です。朝鮮での清正と言えば、蔚山城が有名ですが、蔚山城は、清正は縄張りだけを行い、実際の普

請、作事は浅野幸長や毛利秀元らが担当しています。蔚山城は、完成直前で食料の備蓄が十分でない慶長2年（1597年）12月22日に、明・朝鮮軍約5万7千人に包囲され、籠城軍は、食料と水の枯渇、冬の寒さなどにより、投降寸前まで追い込まれます。翌年慶長3年（1598年）1月2日に援軍が到着し、反転攻勢に転じ、窮地を脱します。蔚山城は慶長3年（1598年）9月にも明・朝鮮軍約3万人に包囲、攻撃されています。このときは、準備万端で10日間籠城し、攻め寄せる相手に大きな損害を与えます。明・朝鮮軍は、攻略の糸口を見つけられず、被害の増大に伴い、攻略不可能と判断し、撤退しました。熊本城は、清正が西生浦城・蔚山城の築城ノウハウと、蔚山城での2度の籠城戦で得た経験を注入して築城した実践の城です。そこが日本の多くの城の中で熊本城が異彩を放つ理由だと思われまます。

そして清正は、城作りの際に重要となる地盤の強化や改良、石垣積み、河川の改修、水の制御などの土木技術を、この築城経験の中で身に着けたと思われまます。清正は、熊本城築城と並行して、白川の付け替えや緑川、菊池川、球磨川などの流路変更、洪水・水量調整・用水対策などの工事を行っていますが、これらは築城経験から得られたノウハウを利用したものです。

(2) 熊本城がもたらした経営拡大政策

熊本城は、石垣が長い、高い石垣が多い、天守が大きい、大きい櫓が多いなど構築物が豪壮なため、維持管理にお金がかかる城です。同程度の石高である筑前、備後・備中、備前、薩摩などの城より遥に豪壮であり、播磨や尾張、加賀など100万石を超える国の城に迫る威容です。徳川時代になると、商品経済が発展する中で、物価が上がり、天下普請や江戸屋敷、定期的な参勤などで出費が増大しましたから、巨大な熊本城を抱えたまま肥後藩を経営するには、少なくとも75万石くらい必要になったと思われまます。それができなければ、熊本城を一部破却して規模を縮小し、8つの支城も廃止するなどして支出を抑えるしかありません。熊本城は、明・朝鮮軍の日本侵攻に備えて築かれた城ですから、明・朝鮮と和議が成立し、侵攻の危険性がなくなるまでは、縮小できません。1607年に将軍秀忠が朝鮮と交通を再開することに合意した後は、明・朝鮮侵攻の可能性はなくなりましたから、これほど巨大な熊本城は必要ありませんでした。従って、一部破却・縮小などの選択もあったと思われまます。清正は、それを選ばず、収入を増やす道を選びまます。そのため盛んに行ったのが、河川の改修による水田の拡大、既存水田での増産および干拓による新たな水田作りです。菊池川、白川、緑川、球磨川などで流路の変更、洪水・水量調整・用水対策などの工事を行い、横島や千丁で新田の開拓を行い、米の増産を図りまます。この結果、清正時代には16万haの水田が増加し、実石高は約21万石増え、75万石程度になったと言われまます。これで、経常的な収支は均衡したと思われまます。新たに本丸御殿を築造し、あま姫が榊原康政の嫡男康勝に嫁ぐに際して豪華な嫁入り行列を出すなどの特別な費用は不足したと考えられまます。このために清正が行ったのが朱印船貿易です。清正は、1604年に長さ30m、幅9mという当時日本で2番目に大きい船を建造し、朱印船貿易に乗り出しています。都合3回朱

印船を派遣したようですが、1607年（西洋、南洋諸島）および1609年（暹羅、交趾）に派遣した時期は、あま姫の榊原康勝への嫁入りや本丸御殿の築造でお金がかかった時期であり、朱印船貿易で稼いで賄ったのではないのでしょうか。当時の日本の輸出品は、鉄・銅・硫黄・漆器などで、輸入品は、生糸・絹織物・砂糖・薬種・伽羅などで、朱印船貿易の利益は大きかったようです。

このように、豪壮な熊本城を維持し、それに見合った国とするために、清正は、経営拡大政策をとったのです。現代の土木開発プロジェクトと商社事業の両方ができた清正は、まれにみる有能な経営者大名でした。

(3) 熊本城がもたらした加藤家改易

清正が急死し、嫡男忠廣が後継となりますが、忠廣は11歳と幼少だったため、藤堂高虎を責任者として幕府が介入し、支城城主ら5人の家老を任命し、集団指導体制を採ります。清正は、家老を置かず、肥後藩が行う事業の立案・実施・施工管理まで自ら細かく関与していましたが、俄かに5人の家老を置いても、これらを代替できるはずがありませんでした。そんな中1618年には、牛方馬方騒動と呼ばれる家老・家臣グループの内紛が生じます。本来ここで加藤家は改易になってもおかしくなかったのですが、1617年に清正の次女八十姫が家康の十男頼宣に、秀忠の養女（家康の三女振姫の娘）が忠廣の正室に嫁ぎ、将軍家と強い姻戚関係があったことから、将軍秀忠の裁定により、改易は免れます。

清正死去後、新たな新田開発や河川改修などの増収対策が進まない中で、大坂城普請や江戸屋敷の拡大、八十姫の婚姻、江戸参勤などに伴い、支出は増加し、肥後藩の財政は逼迫して行ったと思われます。そして1619年の八代地震および1625年の熊本地震によって大きな被害が発生し、多額の復興費用が必要となったことによって、肥後藩の財政は破綻に瀕したことは容易に想像できます。八代地震では、麦島城が倒壊し、球磨川の堤防が決壊するなど甚大な損害が発生し、多額の復興費用が必要となりました。そして、ほぼこの復興が終了したであろうところで、今度は熊本地震に見舞われ、熊本城の石垣の崩壊、弾薬庫の爆発など甚大な損害が生じるなど、新たに多額の復興費用が必要となりました。2016年の熊本地震の復興費用を考えれば分かるように、熊本県の予算規模では、復興費用は捻出できません。当時の肥後藩でも同じ状態であったと思われます。ではどうしたか？肥後藩は、1624年検地を実施し、実石高を96万石に変更しています。これが本当の石高なら問題ありませんが、忠廣後水田開発は滞り、八代地震では八代地方の水田には大きな被害があったと予想され、96万石は、実際より水増しした石高の可能性が高いと思われます。この検地の翌年には、熊本地震が発生し、今度は熊本地方の水田が大きな被害を受けていますから、実際の石高は、96万石より10万石以上少なかったのではないのでしょうか。この96万石の石高に基づき、年貢や復興の労役が課されることとなりましたから、領民の不満は当然大きくなって行ったと思われます。そして、これが1632年の加藤家改易の理由の1つになったと思われます。加藤家改易後、加藤藩から細川藩への引き継ぎに際し、加藤藩は、96万石の石高表を清正時代の73万石に戻して引き渡しています。

結局、清正が作った巨大な熊本城を抱える肥後の経営は、2度の地震という同情すべき事情があったにせよ、膨らむ藩財政に忠廣では手に負えず、石高の水増しを行い、破綻に至ったのです。熊本城がこんなに豪壮でなく、例えば八代城程度であれば、支城も早々に廃止され、江戸屋敷や参勤の費用も抑えられ、もっと小さな藩財政になっていたと思われます。

(4) 熊本城が求めた100万石の経営

清正が築城した熊本城を前提にすると、どうしてもそれに見合う格式の藩政となってしまいます。その結果、肥後藩の経営に必要な支出は増大します。忠廣改易後藩主となった細川家は、古くから続く名門大名家であり、藩主の素養の高さは折り紙付きです。当時の藩主は、清正世代の忠興から嫡男忠利に引き継がれていましたが、忠興は健在であり、また古くから仕える優秀な家臣も揃っていましたから、初代藩主忠利および第2代藩主光尚は、支出の削減と収入の増大の両面から施策を進めたようです。収入増大策は、先ずは基本の新田の開発でした。それでも、参勤交代や江戸屋敷の費用、手伝い普請などで支出は膨れ上がり、細川藩は破産寸前まで行ったようです。このときの財政状況は、知行地を除く藩の収入35万石相当に対し支出45万石相当で、年間10万石相当の赤字だったようです。

このとき、第7代藩主宗孝が江戸城内で人違いにより旗本に斬殺されたことから、弟の細川重賢が部屋住みから第8代藩主となり、大規模な藩政改革を行います。行政改革による行政の簡素化、藩士の削減、藩士の手取り俸禄の削減などにより支出を削減し、藩士の帰農化により農民を増やし、楮・櫨などの商品作物の奨励、特に櫨の専売化により貨幣の調達手段を手に入れ、干拓・河川改修による米の増産により基本収入の増加を図ります。

これらの改革により肥後藩は、支出を抑制しながら収入を45万石相当まで高め、収支を均衡させました。しかし重賢の改革は、これだけにとどまらず、武士の教育機関として藩校時習館を、医師の養成機関として再春館を、薬草の研究機関として蕃滋園を開設し、刑法制度では、日本初の刑法典である刑法叢書の制定、裁判所に相当する穿鑿役を置き行政と司法を分離、島流し刑を教育刑としての労働刑に替えるなどの画期的改革を行います。これらは、当然支出の増大をもたらすもので、その後肥後藩の財政規模は、藩全体としては100万石相当の実石高が必要な規模になったと思われます。全国的な立地から見ると、肥後は本来実国高70、80万石の財政規模で運営していく国だったと思われます。それが、熊本城という豪壮な城があったばかりに、熊本城を抱える国としてふさわしい振舞いをしようとして、背伸びを続けて、ついには100万石の石高の国に至ったと思われます。

(5) 熊本城の功罪

大政奉還後間もない1870年に、当時の藩知事細川護久は、新政府に熊本城の破却を具申しています。その理由として、熊本城は「維新の秋にあつて、建国の形跡を存し、かえって管内の陋習の民族を養い、もつて辺土の旧習を一洗すべからず」とし、「願わくは天下の大体により、熊本城を廃墮し、以て臣民一心の微を致し、かつ以て無用を省き実像を尽くさん」と述べ、政府として熊本城の破却を決定して欲しい、と述べています。これとまで同じことを考えた藩主もいたでしょうが、家臣や領民の反発を考えるととてもできなかったこ

とを、明治維新の気風を利用して、新政府にやらせようとしたのでしょう。この具申は承認されましたが、破却工事に入る直前に中止になったそうです。これを知った反対派の激しい反発があったのでしょう。

この細川護久の見解は、熊本城の持つ一面をついていると思われます。例えば、江戸城が破却された東京は、何ら守るものがなくなり、新しい人を受け入れては、新しい文化を作り上げ、常に新種の生物のように変わり続けています。一方、大坂城が残る大阪は、新しく入ってきた人が大阪弁になるように、大阪の文化を固持し、新しく入ってきた人たちと新しい文化を作ることを拒否しているようです。城は、その地域の文化を固持する働きがあるのではないのでしょうか。熊本城は、熊本では大坂城以上の存在ですので、熊本の文化、熊本人のアイデンティティを固持するのに大きな役割を果たしてきたと思われます。肥後が古くから持っていた肥後もっこすという頑固な性格や、戦国時代に52に上る国人が割拠し、統一者が現われなかった原因である肥後の引き倒しの気質を保持することにも大きな役割を果たしてきたと思われます。

今後日本は、人口減少社会に突入します。熊本の人口も2015年度約177万人から2040年には約147万人、2060年には約117万人に減少すると予想されています(国立社会保障・人口問題研究所予測)。熊本市でも2015年約74万人から2040年には約66万人に減少する予想です。一方、熊本県の展望では、2040年の人口を159万人、2060年144万人に押し留めることとなっています。県の展望の実現には、出生数の増加、若者の県外への流出減少、県外からの移住者の増加が必要です。ここで最も肝心の施策は、職場の確保ですが、熊本県人の2つの気質(肥後もっこす、肥後の引き倒し)は、大きな事業所の運営には不向きであり、地震の断層の存在と共に、大きな事業所(工場)の進出の妨げになると思われます。大きな事業所の運営には、協調性のある人材が不可欠であり、能力がある人を押し上げ協力する精神が不可欠です。熊本県人の気質は、学者、法曹関係者、ジャーナリストなど個人的資質に基づく職業に向いているが、協調性が求められる大企業の社員には向いていないと言われてます。個人的には悪くない評価なのですが、県民総体としては、損をする人が多いと言えます。今後熊本に職場を増やすことを考えるなら、こういう気質を少しでも改めることが必要かもしれません。